

2 課

10月8日

罪の世界における死



安息日午後 10月1日

暗唱聖句

このようなわけで、一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです。すべての人が罪を犯したからです。(ローマ5:12、新共同訳)

このようなわけで、ひとりの人によって、罪がこの世にはいり、また罪によって死がはいってきたように、こうして、すべての人が罪を犯したので、死が全人類にはいり込んだのである。(ローマ5:12、口語訳)

今週の聖句

創世記2:16、17、創世記3:1~7、詩編115:17、ヨハネ5:28、29、
ローマ5:12、2コリント5:21

今週のテーマ

キリストは、宇宙とこの世界を存在させられた神の代理人でした(ヨハ1:1~3、10、コロ1:16、ヘブ1:2)。しかし、父なる神がキリストに特別の榮譽をお与えになり、この世界を共に創造することを公表されたとき、「ルシファーはイエス・キリストをねたみ、嫉妬したのでした」(エレン・G・ホワイト『贖いの物語』14ページ、英文)。

天から追われたサタンは、地上の「アダムとエバの幸福を壊す」ことによって、「天に悲嘆をもたらす」ことを決意しました。彼は「どんな手段を用いても、彼ら〔アダムとエバ〕を不服従に欺き入れることができれば、神は、彼らが赦されるために、何らかの方法を備えられるだろう。そうすれば、自分とすべての墮落した天使たちも、神のあわれみを公平な立場で受けることができるだろうと考えた」のでした(同27ページ)。神は、サタンの戦略をよく知っておられたので、アダムとエバに誘惑に近づかないように警告されたのでした(創2:16,17)。これは、この世界がまだ完全で罪のない状態であったときでさえ、すでに人類には明確に従うべき戒めがあったことを意味します。

今週私たちは、アダムとエバの墮落を通して、罪と死がどのように私たちの世界を支配し、神がエデンで人類のためにまかれた希望の種について学びます。

神によって創造されたとき、世界は完全でした（創1:31）。アダムとエバにとって、死は未知の経験でした。そのような中、神はエデンの園に連れられ、「園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう」（創2:16、17）と言われたのでした。

問1 創世記2:16、17は、完全なエデンにおいて自由意志とはどのようなものであると示していますか。

この神の警告の後、しばらくして、サタンも蛇を装ってエデンに入りました。エバは、蛇が死なずに、禁じられた木の実をおいしそうに食べるのを見ます。「へび自身も、禁じられた実を食べ」（『希望への光』28ページ、『人類のあけほの』上巻40ページ）しましたが、何も起こりませんでした。

問2 創世記3:1~4を読んでください。エバの立場に自分を置いてみてください。なぜ蛇の言葉は説得力をもって聞こえたのでしょうか。

人間の論理で考えれば、蛇の言うことは、神が言われたことよりもずっと説得力がありました。第一に、それまで自然界には罪と死の存在についての証拠は何もありませんでした。第二に、蛇は実際に禁じられた実を食べ、それをとっても楽しんでいました。それなのに、なぜエバは同じようにしてはいけないのでしょうか。神のご命令はあまりに厳しく、無意味に思われました。

不幸なことに、二つの相反する言葉の間で決断するにあたって、エバは次の三つの基本的な原則を無視しました。(1) 人間の理性は霊的なことがらを評価するにあたって必ずしも安全では無いこと。(2) 神の言葉は、私たちには非論理的で無意味に見えても常に正しく信頼できること。(3) それ自体は悪でも罪でもないことを神は服従のテストとしてお用にされること。

私たちは、エデンの園でのエバの経験は、その時1回限りのものではないということを理解する必要があります。日々、一瞬一瞬、私たちは（多くの人にとっては馴染みのないものかもしれない）神の言葉か私たちを取り巻く誘惑かを選ばなければなりません。そして、その選択には永遠の結果が伴うのです。

聖書の明確な教えが、世的な考え方と相反するのは、どのような場合がありますか。

問3 創世記3:1~7を読んでください。神の言葉か蛇の言葉かを選ぶにあたって、エバはどんな基準を用いましたか。

創世記3章は、誘惑の心理について最も明確に表しているたとえの一つです。神はアダムとエバに、彼らが禁じられた実を食べれば、必ず死ぬと警告されました(創2:16、17)。蛇の姿を装ったサタンは、エバを罪に誘惑するために、巧みな言葉を用いました。

第一に、サタンは神の特定の禁止命令を全体に拡大しました。彼はエバに、「園にあるどの木からも取って食べるなど、ほんとうに神が言われたのですか」(創3:1、口語訳)と尋ねます。エバは、禁止されているのは特定の木だけで、もし、食べたり触ったりしたら、死んでしまうからだと反論しました。

次にサタンは神の言葉を否定します。彼は「決して死ぬことはない」(創3:4)と断言しました。

そして最後に、サタンは、神は故意にエバとその夫に最も重要な知識を与えまいとしているのだと言って神を非難しました。

欺く者は、「それ〔禁じられた実〕を食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ」(創3:5)と主張します。

エバの好奇心は彼女をサタンの「欺きの領域」へと引き入れました。この時エバは、神の禁止の命令に忠実であることと、サタンの誘惑に応じることのどちらの決断も強制されてはいません。神の言葉を疑うことによって、彼女は彼女自身の判断、つまり、自分の経験や観察に頼って、これらの相反する言葉の一方を選ぶ決断をしたのです。

彼女はそれを食物の観点から見て、「それは食べるに良く」、次に美的な観点から見て「目には美しく」、最後に論理的に分析して、「賢くなるには好ましい」(創3:6、口語訳)と考えました。こうして彼女は、蛇の言葉を心に留め、禁じられていた木から食べる良い理由を見いだしたのです。不幸にして、これが、彼女のしたことでした。

ある人々は、どんな形であれ知識は、人がそれを「良いもの」(1テサ5:21)と考える限り有効だと主張します。しかし、エデンの園でのアダムとエバの悲劇的な経験は、知識はそれ自体が、その周囲にも有害でありうることを立証しています。実際、私たちが知らないほうが良いことがいくつもあるのです。

この物語は、人が罪を正当化しがちなことについて何を教えていますか。

問4 創世記3:4を読んでください。この嘘は、各時代を通じてどのような形で繰り返されてきたのでしょうか。

この嘘において説得力のある主張の一つが、一般に見られる霊魂不滅の思想です。この概念が多くの古代の宗教と哲学の背景にあります。古代エジプトでは、ミイラの風習やピラミッドに見られるような埋葬のための建築の動機となりました。

この思想はまた、ギリシア哲学を支えるおもな柱の一つとなりました。例えば、プラトンの『国家』のなかで、ソクラテスはグラウコン（プラトンの兄）に次のように尋ねます。「お前はわれわれの霊魂は不死であり、決して消滅することはないのを知らないのか」。プラトンの『パイドン』のなかでソクラテスは、同様の調子で次のように述べています。「霊魂は不死であり、不滅である。そしてわれわれの霊魂は真にハデスに存在するだろう」。これらの哲学的理念は多くの西洋文化を形づくり、そして使徒時代後のキリスト教さえも形成しました。しかし、これらは、もっと以前に、すでにエデンの園でサタン自身が生み出したのです。

エデンでの誘惑の中心には、サタンがエバに断言した「あなたがたは決して死ぬことはないでしょう」（創3:4、口語訳）があります。この強調された主張によって、サタンは自分の言葉を神の言葉よりも上に置いたのです。

問5 霊魂不滅の思想とは対照的に、これらの聖句は何を教え、サタンの嘘に対抗するためにどのように用いることができるのでしょうか。（詩編115:17、ヨハ5:28、29、詩編146:4、マタ10:28、1コリ15:51~58）

霊魂はもともと不滅であるというサタンの主張は、現代社会にも根強く残っています。書籍、映画、テレビ番組はすべて、私たちが死んだとき、別の意識を持つ状態に移行するという考えを広め続けています。残念なことに、この誤りが多くのキリスト教会の講壇からも語られています。科学でさえその影響を受けており、「脱物質後の人間」としてまだ生きている死者と交信する技術を開発しようとしている財団がアメリカにはあります。まん延するこの誤りが、人類史の最後の諸事件の中で重要な役割を果たすことは、驚くにあたりません。

この時代にあって、なぜ感覚よりも御言葉に頼るべきなのでしょう。

問6 創世記3:7~19とローマ5:12を読んでください。罪がもたらしたおもな結果はどのようなものでしたか。

蛇の巧みな言葉に捉えられて、エバは、自らの歩む道のはるか先にどのような結果が待ち受けているか予想することはできませんでした。禁じられていた実を食べるといふ、実際に目に見える行為そのものは、それほど重要ではありませんでした。そのような不服従の行為によって、エバは神への忠誠を棄て、サタンに対する忠誠を新たに誓ったのです。

創世記3章はアダムとエバの墮落とその最も悲劇的な結果を描いています。神学的には、二人は「神恐怖症」（神を恐れること）に襲われ、神から隠れました（創3:8）。心理社会的評価から言えば、彼らは自分自身を恥じ、お互いを非難しました（同3:7、9~13）。肉体的には、彼らは汗し、苦痛を感じ、最後には死ぬのでした（同3:16~19）。さらに生態学的に言えば、自然界はその姿を変えました（同3:17）。

エデンの園はもはや、そのかつてのような美と喜びに満ちた場所ではなくなりました。「アダムとエバは、花がしほみ、葉が落ちるといふ死の最初の徴候を見て、今日、人々が死者のために嘆く以上の悲しさを味わった。か弱い優美な草花が枯れるのは確かに悲しいことであった。しかし、立派な樹木が葉を散らすときに、生きているものは、みな、死ぬ運命にあるという厳粛な事実を、はっきりと人の心に思わせるのであった」（『希望への光』32ページ、『人類のあけぼの』上巻51ページ）。

アダムとエバは、命が終わるといふ意味ですぐに死ぬことはありませんでした。しかし、彼らはまさにその同じ日に死の宣告を受けたのでした。主はアダムに言われました。「お前は顔に汗を流してパンを得る／土に返るときまで。お前がそこから取られた土に。塵にすぎないお前は塵に返る」（創3:19）。彼らの墮落は実に人類すべてにまで悲劇的な結果をもたらしたのでした。使徒パウロはそれを次のように説明しています。「このようなわけで、一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです。すべての人が罪を犯したからです」（ロマ5:12）。

その悲しくも痛ましい事実は、あらゆる時代にわたって人類が経験してきたことであり、今日も私たちはエデンで起こったことの結果に苦しんでいます。しかし、イエスと十字架のおかげで、罪が二度と犯されることのない世界で永遠の希望を持つことができることは、なんと感謝すべきことでしょう。

創世記3章は、墮落後、世界を襲った恐ろしい悲劇を描写しています。すべてが変わり、アダムとエバはそれまでの世界と変わり果てた世界の違いを目の当たりにしました。

しかし、その挫折と絶望のただ中であって、神は彼らに現在の保証と未来の希望をお与えになりました。まず神はメシア到来の希望の言葉をもって蛇を呪われました。「お前と女、お前の子孫と女の子孫の間に／わたしは敵意を置く。彼はお前の頭を砕き／お前は彼のかかとを砕く」(創3:15)。

「敵意」という言葉は、長く続く善と悪の間の宇宙規模の争闘を意味するだけでなく、個人的な罪に対する嫌悪感をも意味し、それは神の恵みによって人の心に植えつけられたものでした。私たちは生まれながらにまったく墮落しており(エフェ2:1、5)、「罪の奴隷」(ロマ6:20)です。しかしながら、キリストが人類1人ひとりのうちに植えつけられた恵みは、私たちのうちにサタンに対する敵意を生み出しました。そしてエデン以来の天の賜物であるこの「敵意」は、私たちがキリストの救いの恵みを受け入れることを可能にします。この回心の恵みと心を一新する力がなければ、人類はサタンの捕虜であり続け、常にサタンの命令に従う僕となるでしょう。

主は次に、このメシア到来の約束を指し示すために、動物による犠牲をお用いになりました(創3:21参照)。「神の特別な指示によって、アダムが罪のための犠牲を献げたとき、それは彼にとって最もつらい儀式であった。彼の手は、罪の犠牲とするために、神だけが与えることのできる命を奪うために上げられねばならなかった。それは彼が最初に見届けた死であった。彼が血を流し、死の痛みにもだえ苦しむ犠牲の動物を見上げたとき、彼は信仰によって、犠牲が予表する、人類の犠牲として死ななければならない神の御子を見るのであった」(『贖いの物語』50ページ、英文)。(2コリ5:21とヘブ9:28参照)

アダムとエバは、いずれ死ぬことを知りながら(創3:19、22~24)、エデンの園を後にしました。しかし、彼らは裸で、あるいは自分たちで作ったいちじくの葉を覆って(同3:7)園を出たではありませんでした。神ご自身が、彼らのために、キリストの義の衣を象徴する(ゼカ3:1~5、ルカ15:22)「皮の衣を作って着せられた」(創3:21)のでした。その当時、つまり、最初から、エデンにおいてさえ、福音は人類に啓示されていたのです。

参考資料として、『人類のあけぼの』第4章「エデンの園の悲劇」、第5章「人類救済の計画」、『教育』『善悪の知識』の章を読みましょう。

近年、臨死体験と呼ばれるものの研究がなされました。人は心臓の鼓動が止まり、呼吸が停止したときに「死ぬ」わけですが、彼らはその状態から生還し、臨死の間にもう一つの世界を漂い、光の存在に遭ったと語ります。また、死んでずいぶん経った親類に遭ったと語る人さえいます。多くの人々は、クリスチャンでさえ、死の真実を理解しておらず、これらの話が靈魂の不死をより確かに証明するものだと思っています。そして、これらの経験をしたほとんどの人は、臨死体験中に遭った霊的存在が、慰めの言葉を語り、愛、平和、善について言及したと主張します。しかし彼らは、キリストの救いについて、罪について、また、裁きについては何も聞いていません（これらの話が何かが間違っているという明らかな警告のはずです）。クリスチャンとして死後の世界を生きるならば、キリスト教の最も基本的とも言うべき教えを少しでも聞くことはなかったのでしょうか。彼らが教えられていることの多くは、ニューエイジ思想の教義のように聞こえます。それは、多くの場合、彼らが「死ぬ」前よりも、キリスト教に傾倒していないことを説明しています。また、臨死体験をして天国を垣間見たと確信するクリスチャンが、ニューエイジ思想の感傷主義とは対照的なキリスト教の神学を誰も手に入れなかったのでしょうか。彼らは、エデンでエバを欺いたのと同じ者によって、かつ、同じ嘘によってだまされているというのがその答えです。

話し合いのための質問

- ① アダムとエバは、神の赦しは必ずしもすべての罪の結果を帳消しにはしないことを、どのように示していますか。なぜこのような重要な真理を常に覚える必要があるのでしょうか。
- ② アダムとエバに対して善悪を知る知識の木は、敵の「欺きの領域」でした。私たちが誘惑に陥れる「欺きの領域」は何でしょうか。
- ③ サタンは神の民に、「彼らをキリストの要求は最初に信じた時ほど厳格ではなくなっているという結論に到達するように導こう。彼らは俗世間と同じようになり、俗世間に対してより大きい影響力を持つようになる」（『聖霊に導かれて——牧師と信徒への勧め』下巻 264 ページ）と信じさせようとしています。このような^{ちから}に陥らないために私たちに何が必要でしょうか。